

『続詞花和歌集』四季部の配列構成について

鈴木徳男

はじめに

清輔の撰集である『続詞花和歌集』（以下『続詞花集』と略称、勅撰集なども同様）に関して、すでに先学の研究成果があり、筆者もいくつかの拙論を発表した。^{注2} 本稿では『続詞花集』四季部について、各入集歌の主題を通して、その配列構成を概観する。^{注3} 四季部は全二十巻中、第一巻から第六巻にあたる。

春、夏、秋、冬のそれぞれの部立別に作品ごとの歌題、歌材などを示す表を作成して構成上の要点を論ずる。まず、以下に掲載する表について若干の説明を加える。表には一連番号、主題（中心的歌材）、その他の歌材・歌枕など、作者、主な出典資料、備考の各欄を設けた。一連番号は一から三二五まで、『続詞花集』の全入集歌数九九八首の約三分の一にあたる。主題は、一首中の中心となる歌材によって定めたが、配列の展開が明らかになるように歌題として掲出し素材名そのままでない場合がある。その他の歌材・歌枕などのところでは、

『続詞花和歌集』四季部の配列構成について

詠歌内容の細部まで表わすことはできないが、ある程度、表現（詞統き）の面でも一首の作意や配列の意図が把握できるように考慮した。

「」で示したのは詞書から出題の判明するものである。作者名は官位などをはぶき、できるだけ簡略な呼称によっている。主な出典資料は詞書に示されている歌壇的催しを重視して記した。（）でくくったように、厳密には選歌資料と言にくい場合もある。空欄のほとんどの部分は、詞書で「題知らず」などとなっている作で、家集もしくは歌稿のようなものから採用したものと思われる。その中には現存する家集に拠ったことが明確な作もある。また、詞書に私的な作歌事情が記述されている場合も空欄にしている。ただし、詞書に典故が明記されていることも、他の撰集や家集などを直接の資料とし、そのまま踏襲していることも考えられるので、欄に抽出した歌壇的行事が必ずしも撰集資料とは限らないが、多くは撰者の手元にあった資料によったものとみなして支障ないと思われる。備考欄は、他の勅撰集への入集状況を示した。

「統詞花和歌集」四季部の配列構成について

一

春歌は巻第一、巻第二の上、下に分かれる。春部上は三十六首で、源俊頼の、立春を詠んだ次の作からはじまる。

いつしかと今朝は氷もとけにけりいかでみぎはに春をしるらん
春歌の巻頭であると同時に、『統詞花集』の最初を飾る詠である。

〔春上〕

一連番号	主 題 (中心的歌材)	その他の歌材・歌枕など	作 者	主な出典資料	備 考
一	立春	汀 氷	俊頼		統拾遺集・雑春
二	立春	若水 板井	崇徳院		
三	立春	春の初風 岩間の氷 鳴滝	好忠	三百六十首歌	
四	立春	(岩たたく)雪の下水 三室山(谷)	国信	堀河百首	千載集・春上
五	立春	山里 雪 柴のとぼそ 「正月一日」	肥後		玉葉集・雑一
六	立春	峯の日 軒の垂氷の下の玉水	好忠	三百六十首歌	
七	子日	御垣内の小松原	経信	承保四年内裏子日	金葉集三奏本・春、新古今集・賀
八	子日	野辺 姫小松	道濟	東三条院四十賀屏風	金葉集三奏本・春、玉葉集・賀
九	子日	小松	小弁		玉葉集・春
一〇	子日	松 雪「雪中子日」	新少将		
一一	雪	雉子(の声) 御狩野	能因		
一二	若菜	雪のむら消え 春日野の飛火の野辺 袖	教長	久安百首	
一三	若菜	故郷の霞の野辺	能宣	資頼家賀屏風	
一四	若菜	筐	美濃		
一五	鶯	深山隠れの古巢 梢にうつる「初聞鶯」	実行		
一六	鶯	山里 初音	心覚母	崇徳院内裏歌会	

二

立春の朝、氷が解けた池のほとりに待望の春を知るといふ立春の伝統的内容の詠で、三句切れの詠嘆など、巻頭にふさわしい長高い詠みぶりであると思われる。^{注4} また、二首目は崇徳院詠(新院御歌)であり、作者の配列にも巻頭を意識したものが認められる。春部下が、経信、二条天皇詠(御製)の順ではじまっていることを考えると、経信、俊頼の親子に対する撰者の評価のほどがみられ、崇徳院、二条天皇に対する敬意が顕著に示されている。次に、春部上の構成を表にする。

一七	鶯	山里 初音	教長		
一八	鶯	我宿の柳(の糸)	道綱母		
一九	柳	霞の衣 春風 青柳の糸	季遠		
二〇	霞	谷川の音 吉備の中山	孝喜	承暦二年内裏歌台 (津の国にて)	金葉集二度本・春 詞花集・春(被除歌)
二一	霞	潮路 朝 沖の片帆「霞隔行舟」	隆縁		
二二	霞	春駒	盛経		
二三	梅	我宿	兼盛	内裏屏風歌	
二四	梅	雪	元輔		
二五	梅	我宿のつま(に匂ひし) 垣根の花	行尊		
二六	梅	春の夜 あかぬ匂ひ	読人不知		
二七	梅	春風	祐盛		
二八	梅	香袖 垣根	資隆		
二九	梅	香 山里 宿「山家梅」	国基		
三〇	梅	風 山里 花のいろ「絵に：女ひとり」	道信		
三一	梅	下行水 花散る程「水辺梅花」	心覚		
三二	梅	流れくる水「梅の花の水に浮きて流る」	嘉言		
三三	帰雁	玉章 春かへりごと	意尊	(雅家歌合) 久安百首	金葉集一度本・春
三四	帰雁	涙 またこむ秋	季通		
三五	苗代(水)	花 (春の)小山田	小左近		
三六	壺董	雉子鳴く岩田の小野	頭季	堀河百首	千載集・春下

春部上の主題配列は、立春(歌数六)、子日(四)、雪(一)、若菜

(三)、鶯(四)、柳(一)、霞(三)、梅(一〇)、帰雁(二)、苗代(一)、壺董(一)である。各主題は、二首、三首のものから梅の十首まで歌

数に多少の差異があるが、整然と並べられており、立春、子日、若菜、鶯、霞、梅、帰雁といった伝統的歌題に基づいて、おおよそそれぞれの本意に即した趣向表現の詠作が配列され、歌題ごとにひとまと

まりの世界を形成している。

また、雪を主題とする作は能因法師詠一首(一連番号一一)であるが、次のようである。

御狩野にまだ降る雪は消えねどもきぎすの声は春めきにけり
御狩野を背景にして雪ときぎすの声が対照的に詠みこまれている。
主題は春に降る「雪」としたが、春めくきぎすの声が一首の眼目とも

「統詞花和歌集」四季部の配列構成について

『統詞花和歌集』四季部の配列構成について

考えられる。ただし、子日を詠む一〇歌、若菜を詠む一二歌にも春雪が詠みこまれていて、これら前後三首は雪の景気を基調として関連づけられている。歌材をとりあげれば、雪の降りかかる松、いまだ雪の残る御狩野に鳴くきぎす、雪の消え残る春日野の飛火野の若菜と並べられており、能因作の一一歌は子日の主題から若菜の主題へと移行する間に巧みに配列されていると思われる。

柳を主題とする作も源季遠詠（一九）一首であるが、次のようである。

春風に霞の衣ほころびてたえまにみゆる青柳の糸

ほのぼのとした春風に青柳のゆらぐ様が伝統的な表現ながらみごとにとらえられている。道綱母の作である一八歌にも宿の柳の糸が詠まれている、柳の糸で一八歌と一九歌は結ばれている。また孝善作の二

〇歌は霞を主題としているが、一九歌には糸の縁語として霞の衣、そのほころびが詠まれており、霞が二〇歌への橋わたしをしている。三五歌の主題である苗代、三六歌の主題である壺重もそれぞれ一首ずつで、巻末において比較的特異な歌材が並べられているが、三五歌には花が詠みこまれ、三六歌の壺重とともに、春部下につながる作として位置していると思われる。なお、春上の巻軸である三六歌の作者が顕季（撰者祖父、六条藤家の祖）であることが、巻頭とあわせて一応注目される。

一一

春部下は五十九首で、構成を表にすると次のようになる。

〔春下〕

一連番号	主 題 (中心的歌材)	その他の歌材・歌枕など	作 者	主な出典資料	備 考
三七	桜花	「花契多春」御垣が原	経信	(白河院歌会)	新拾遺集・春下
三八	桜花	「山花始開」	二条天皇	(内裏歌会)	千載集・春上
三九	桜花	多くの春	師実	京極家に白河院御幸の翌日	
四〇	桜花	宿(に句へる) 春くる人のかざし	資業	高倉一宮(祐子内親王)家歌合	続後拾遺集・春下
四一	桜花	宿(のけしき) 句ひ 風	兼房	同右	千載集・春上
四二	桜花	春霞 句ふあたり 風 山桜	中納言女王	寛治八年八月高陽院家歌合	千載集・春上
四三	桜花	春の心 春風	通俊	同右	続千載集・春下
四四	桜花	春の霞 山 心	頭綱	同右	千載集・春上
四五	桜花	白雲 立田山	為業	同右	千載集・春上
四六	桜花	霞 雲 峯	雅頼		

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

七五	落花	峯の白雲 吉野山	季通	久安百首	千載集・春下
七六	落花	青根が峯 白雲 吉野川	頼政	久安百首	
七七	落花	風 惜しむ人	教長	同右	
七八	落花	風 木のもと毎 おのがもの	兵衛	同右	新続古今集・雑上
七九	落花	はかなさ(を恨みもはてじ) うき世 心	覚性		千載集・雑中
八〇	落花	またもこむ春 限りの心地	為業		
八一	落花	(散らさじと思ふ)花 しぬばかり	政平		
八二	落花	こりずまに散る折 過ぎにし春の同じ思ひ	信宗		
八三	落花	風 花のしるべ「随風尋花」	定頼		続後撰集・春下
八四	落花	青葉隠れの花 山桜「尋残花心」	静厳		新後撰集・春下
八五	山吹	井手の里人 花のゆかり	崇徳院	久安百首	千載集・春下
八六	山吹	吉野川 岸「水辺款冬」	範綱		
八七	花(山吹と藤)	ふた心ありける人	輔親		
八八	藤(波)	月 薄紫の雲「月前藤花」	為業		
八九	藤(波)	まがきの島 末の松山	能宜		新拾遺集・春下
九〇	藤	空よりおつる波 山里 松	道濟		
九一	藤(波)	るぜき 松のしづえ	俊恵		
九二	藤(波)	春ふかく 住の江の岸	好忠		
九三	惜春	心慰む方もなき	実清		
九四	三月尽	命あらば又も逢ひみむ春	具平		
九五	暮春	春のゆくえ 人の心	雅光		千載集・春下

春下の主題は桜花(四八、落花一四も含む)、山吹(三三)、藤(五)、惜春(一一)、三月尽(一一)、暮春(一一)である。なお巻末の三首について惜春、三月尽、暮春と詠歌内容に即して分けたが、広義には暮春あるいは三月尽という主題で三首をひとまとめにできると思われる。春下は大半が桜花を詠んだ作品で占められており、春上との歌数が不調

和であることも、桜花を春下に一括するための作為であると思われる。桜花を詠みこんだ作品群四十八首は、四季部全体の主題中で、最も多数である。二位は秋月三十六首で、春の花、秋の月が四季を代表する歌材となっている。これら桜花の作品群は、内容から三つの歌群に

大別できる。(一)三七歌から五四歌あたりまで。(二)五五歌あたりから七〇歌まで。(三)七一歌から八四歌まで。(一)群は爛漫と咲き匂ふ桜を賛美したもの。(二)群は述懐を託したもの。(三)群は落花を詠むもの。

(一)群がいくつかの点で注目される。まず、三八歌が二条天皇詠であるものの三七歌の経信から四四歌の頭綱までは前代の歌人の詠が並べられ、後半の四五歌の為業から五四歌の実能までは当代か当代に近い歌人が並べられており、作者の面から前後に区別される。次に、出典資料をみると、前半は高倉一宮(祐子内親王)家歌合(四〇、四一)寛治八年八月高陽院家歌合(四二、四三、四四)から採用された作品が中心であり、後半は崇徳院近衛殿御幸和歌(四八、四九、五〇)、鳥羽院白河花見御幸和歌(五三、五四)から採用された作品が目立っている。これらの歌壇的催しを構成の中核に置いて配列されていることが指摘できる。

さらに、『千載集』との共通歌が七首あり、それぞれの集の一連番号を示して表にすると次のようになる。

	統詞花集	千載集
	三九	五〇
	四二	四八
	四四	四九
	四八	四六
	四九	四七
	五三	四四

〔夏〕

『統詞花和歌集』四季部の配列構成について

五四

四五

『千載集』の四五歌から五〇歌までの七首が、すべて『統詞花集』の作品と共通している。言い換えれば、俊成が『千載集』編纂の際、春歌の部分の構成において『統詞花集』の桜花のこの歌群の配列を参考にしたと思われる。(二)群では『千載集』との共通歌は一首もなく、述懐性の強い作品群は俊成の評価外であったものと思われる。また三群では五首が『千載集』にみえる。うち七二歌、七四歌、七五歌は『千載集』春下に入集する(なお、七四、七五は『千載集』では七九、八〇で二首の並びのまま選入されている)が、七〇歌、七九歌は雑歌の部にみえる。したがって、(一)群がとくに『千載集』との関係が深く、各作品のみならず配列構成の面においても、俊成が相応の評価を与えていたことが知られる。^{注5)}

四季部を代表する歌材である桜花の作品群には、作者、出典資料の選択や歌材や表現内容の展開に撰者の周到な配慮がうかがわれる。因みに五〇の頭広(俊成)詠「面影に花のすがたをさきだてていくへ越えきぬ峯の白雲」は、当時、俊成のおもて歌と考えられていた作である(鴨長明『無名抄』)。^{注6)}

三

夏歌は巻第三、五十五首で、構成を表にすると次のようになる。

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

一連番号	主 題 (中心的歌材)	その他の歌材・歌枕など	作 者	主な出典資料	備 考
九六	更衣(首夏)	ぬぎかふる花の袂の移り香 春の名残	親隆	久安百首	
九七	首夏	ならの葉 我宿 しげみにせずむ	恵慶		新古今集・夏
九八	首夏	桃の花 山里 都「うづきついたち」	源信		
九九	卯の花	梅にまがふ 鶯	尚忠		
一〇〇	卯の花	小野の細道	信通	鳥羽殿五番歌合	
一〇一	卯の花	白河の関 垣根	季通	同右	千載集・夏
一〇二	卯の花	音無川(の波)	盛清		
一〇三	卯の花	山里	相方		金葉集三奏本・夏 新千載集・夏
一〇四	卯の花	桂の里 月の影	読人不知		新古今集・夏
一〇五	葵	神山 ふたば	小侍徒		
一〇六	時鳥	さやまが峯 宿 衣(かたしく)	範永	(道雅家障子絵)	
一〇七	時鳥	聞きつと語る人 「人伝に郭公を聞く」	忠通	(崇徳院内裏歌合)	
一〇八	時鳥	夜もすがら待つ 山のかひ	成範		
一〇九	時鳥	初音	師賢		
一一〇	時鳥	初声 ならしの岡 いく夜	隆資		
一一一	時鳥	一声 待てとたのむる人	小左近		続古今集・夏
一一二	時鳥	初音「夢聞郭公」	伊通		
一一三	時鳥	雲の上	行宗	(崇徳院内裏歌合)	
一一四	時鳥	一声 しらぬ雲居	家俊	鳥羽殿五番歌合	
一一五	時鳥	二声となどか来鳴かぬ 短かき夏の夜	基俊	郁芳門院根合	
一一六	時鳥	などか来鳴かぬ よがれ	公保		
一一七	時鳥	なべて聞かする声	忠通		
一一八	時鳥	むかしの声	道濟		
一一九	時鳥	人くるしめ まどろめばまた来鳴く	永実		
一二〇	時鳥	聞く夜 ねられず	教良母		千載集・夏
一二一	時鳥	夜半 一声鳴きて明けぬ	成通		

一一二	時鳥	夏の夜 明くるも知らず	雅定		
一一三	時鳥	高天の山 とをちの里	勝超		
一一四	時鳥	住の江 待つにかひある心地	覚忠		
一一五	時鳥	稻荷山 夕かけて	頼実		(住吉にて)
一一六	時鳥	有明の月 「曉月聞郭公」	仲実		(八条の山庄にて)
一一七	時鳥	忍び妻おき行く空 「曉郭公」	顯広		
一一八	時鳥	逢坂山 「郭公声稀」	忠清		
一一九	花橋	いにしへを忍ぶ	通清		
一二〇	五月雨	むかしのけしき 勝間田池	兵衛		久安百首
一二一	五月雨	淀の渡り 美豆野原	成元		通宗家歌会
一二二	五月雨	花色衣 笠取山	顯房		郁芳門院根合
一二三	菖蒲	池の汀	堀河院		
一二四	菖蒲	宿 つまにひかる	堀河		久安百首
一二五	菖蒲	七夕の心地 年に一度つまにみゆ	実円		
一二六	螢	「五月五日」	読人不知		顯房家歌合
一二七	(晩)螢	五月闇 沢辺の草	覚性		
一二八	照射	釣簾の外 宵のともしび	忠兼		
一二九	照射	山の雫 尾上に夜を明かしつ	匡房		堀河百首
一三〇	照射	宮城原 しのぶもぢずり 下露	心覚		
一三一	夏月	夏河の岩瀬 (冬にしられぬ) 氷「水上夏月」	覚性		
一三二	夏月	有明の月 夏の夜	俊頼		
一三三	夕立	とをち 天の香具山 雲隠れ「雲隔遠望」	忠通		(崇徳院内裏歌会)
一三四	蘆	夏深し 玉江 「水草隔舟」	好忠		三百六十首歌
一四五	納涼	荻の葉 風のそそふく	長実		(二条皇太后宮家歌会)
一四六	納涼	松がね 岩もる清水 我身ひとつの秋	道経		
一四七	夏風	「樹陰翫泉」	実能		実行家歌合
一四八	藤袴	夕され 篠のをざさ 秋のけしき	美濃		(二条皇太后宮家歌会)
一四九	萩	秋の初風 「待草花」	経衡		
		夏の野辺 鹿のしがらみ 「秋花夏開」			

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

雅定			
勝超			
覚忠			
頼実			
仲実			
顯広			
忠清			
通清			
兵衛			
成元			
顯房			
堀河院			
堀河			
実円			
読人不知			
覚性			
忠兼			
匡房			
心覚			
覚性			
俊頼			
忠通			
好忠			
長実			
道経			
実能			
美濃			
経衡			

一五〇 祓

麻の立ち枝 木綿

季通

久安百首

金葉集二度本・夏、千載集・夏

夏部の主題は更衣(一)、首夏(二)、九七は青葉、九八は山里の桃の花が中心の歌材)、卯の花(六)、葵(一)、時鳥(二三)、花橘(一)、五月雨(三)、菖蒲(三)、螢(二)、照射(二)、夏月(二)、夕立(一)、蘆(二)、納涼(三)、夏風(一)、藤袴(一)、萩(一)、祓(一)となる。

夏歌の代表的な歌題は時鳥である。時鳥を詠みこむ作品群二十三首にはいわば六段階の展開をみとめることができる。(一)一〇六歌から一〇八歌まで、初音を待つ趣向の作。(二)一〇九歌から一二二歌まで、初音を詠む作。(三)一一三歌から一一八歌まで、時鳥の鳴く声を詠む作。

(四)一一九歌から一二二歌まで、夜半に時鳥を聞く趣向の作。(五)一二三歌から一二五歌まで、名所で鳴く時鳥を詠む作。(六)一二六歌から一二八歌まで、曉方に鳴く時鳥を詠む作。「時鳥」の歌題を趣向別に六つの歌群に細分し、それぞれ時間の移行を主軸にして巧みに並べられている。このような時鳥の主題のあつかいは先行する勅撰集にはみられない独自の方法である。

その他に注意される主題として「夕立」を詠む次の俊頼詠がある。
とをちには夕立すらし久かたの天の香具山雲がくれ行く(一四二)

(秋上)

『新古今集』の入集歌でもある。『詞花集』に、やはり「夕立」を主題とする作として「川上は夕立すらしみくづせく梁瀬のさ波立ちさわぐなり」(好忠)がみえ、夏月を詠みこんだ歌と並べられているところも類似しているので、『詞花集』を意識した歌題と思われるが、俊頼詠のスケールの大きな情景描写をみると撰者の鑑賞眼の確かさが理解できる。次の一四三歌は、夏の深まった水辺に蘆のしげる様を詠んでいる。一四四歌から一四九歌までの歌群には「秋」の語句をもつ作を配して、徐々に夏から秋へと推移する気配を表わしている。
出典資料をみると、久安百首の作が四首あるが、鳥羽殿五番歌合(一〇〇、一〇一、一一四)、郁芳門院根合(一一五、一三二)が夏部の主要な資料として扱われていることが知られる。

四

秋歌は巻第四、巻第五の上、下に分かれる。秋部上は六十七首で、構成を表にすると次のようになる。

一連番号	主 題 (中心的歌材)	その他の歌材・歌枕など	作 者	主な出典資料	備 考
一五一	早秋	山里 「山家早秋」	雅兼	忠通家歌会	
一五二	秋風	夏衣 萩の葉	道濟		
一五三	秋風(初風)	朝ぼらけ 萩の上葉 露	好忠	三百六十首歌	

一五四 早秋
 一五五 七夕
 一五六 七夕
 一五七 七夕
 一五八 七夕
 一五九 七夕
 一六〇 七夕
 一六一 七夕
 一六二 七夕
 一六三 七夕
 一六四 七夕
 一六五 七夕
 一六六 秋月
 一六七 秋月
 一六八 秋月
 一六九 秋月
 一七〇 秋月
 一七一 秋月
 一七二 秋月
 一七三 秋月
 一七四 秋月
 一七五 秋月
 一七六 秋月
 一七七 秋月
 一七八 秋月
 一七九 秋月
 一八〇 秋月
 一八一 秋月

浅茅が花(原力) 露
 天の川波 契りけむ程 絶えせぬ今日
 天の川 絶えぬ契り
 天の羽衣 暮れ待つほど 袖
 天の川 雲居 星合の空
 天の川 急ぐ渡りに舟を貸しつ
 天の川瀬 舟居
 花染の衣 露
 天の羽衣 星合の空の明けぬ
 天の羽衣 彦星の今朝たちかへる 露けさ
 浮雲 たなばたのかへるあした
 天の川 かへさ 袖
 山の端 横ぎる雲の絶え間
 山のあなたに住む人
 秋風 夜寒 雲の衣
 天の川瀬 氷る
 ねられざりけり「月不如秋」
 月みてぬべき心ち
 雲 峯のあらし
 ねであかしつ「山寺に侍りて 京なる人に
 つかはす」
 「絵にひとり月みたる人」
 「連夜見月」かたわれ月 有明の空
 「連夜見月」月のさかり 昼まどろむ
 薄雲かかる有明の月
 月を残してあくる東雲
 かたぶきにけり
 月のある山のあるの里人
 屏風の絵に月の夜山路をゆく人 名もしらぬ
 鳥

顕季
 頼通
 範綱
 読人不知
 三河内侍
 国基
 為言
 実重
 冷泉
 実行北方
 覚性
 顯方
 公実
 三条院
 公通
 道経
 教長
 和泉式部
 二条天皇
 道济
 具平
 行盛
 雅光
 新院紀伊
 成通
 嘉言
 惠慶
 道济

(堀河百首)

堀河百首

忠通家月三十五首

長承三年頼輔家歌合

長承二年内裏十首歌会

永曆二年内裏百首

金葉集三奏本・秋、新古今集・秋上(切出し歌)続古今集・雑上

新後拾遺集・雑秋
 金葉集三奏本・秋

新古今集・秋上

玉葉集・秋下

千載集・秋上

新古今集・秋上

千載集・雑上

千載集・秋上

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

一八二	秋月	をばすて山に月をのぞむ人	家経		
一八三	秋月	「水上月」	越後	久安百首	新後拾遺集・秋上
一八四	秋月	水や空空や水ともみえわかず	読人不知	永曆二年内裏百首	千載集・秋上
一八五	秋月	水のしらたま 清瀧川	頭広		
一八六	秋月	さび江	二条天皇		
一八七	秋月	逢坂の関の清水	頭輔		
一八八	秋月	(播磨路や)須磨の関屋	師俊	忠通家歌会	続拾遺集・秋上
一八九	秋月	「月閑中友」	覚性	忠盛家歌会	千載集・雜上
一九〇	秋月	「古郷月」板井の清水 水草	俊恵	承曆二年殿上歌会	千載集・雜上
一九一	秋月	有明の空	匡房	崇徳院内裏歌会	
一九二	秋月	昼にかはらぬ月 あくる 鳥の音	公行	(師実家歌会)	
一九三	秋月	あくるもしらぬ月の光	讚岐		
一九四	秋月	天の原 袂に月の出づ	増基		新古今集・雜上
一九五	秋月	月にながむる心	最度		
一九六	秋月	みる人の心 月影すめる宿	经信母		続古今集・秋上
一九七	秋月	月に心をなぐさむ うき身	道経	大治三年住吉歌会	新古今集・秋上
一九八	秋月	ながむるからにものかなし うき世	経盛		
一九九	秋月	山の端 秋もふけぬ 九月十三夜	実行	実能の仁和寺	
二〇〇	秋月	いはれの ちぐさの花 露 「月照草花」	隆縁		
二〇一	秋月	野辺の月 萩の下露 風	忠通	忠通家月三十五首	新古今集・秋上
二〇二	雁	伊勢の浜萩「旅中聞雁」	匡房		新古今集・羈旅
二〇三	雁	かきつらねたる玉章 朝霧	崇徳院	久安百首	新後拾遺集・秋上
二〇四	雁	かきながしたる玉章 水の面	堀河	同右	
二〇五	鹿	露、萩の下葉 秋ののほら	相模	高倉一宮家歌会(永承五年六月)	続千載集・秋上
二〇六	鹿	秋萩の下葉 妻こふる鹿の心	経衡	同右	
二〇七	鹿	宮城野の小萩が原「旅宿鹿」	覚性		
二〇八	鹿	あしたの野辺 妻さだまらぬ音	雅光	忠通家歌会	
二〇九	鹿	「所の名によせて」	輔仁		千載集・秋下

二二〇 鹿	山かたそひに家居す	經信		
二二一 鹿	山里 寢覚めがち	惠慶		
二二二 鹿	身のうさ 寢覚め	季通	久安百首	
二二三 鹿	山里 朝霧	通俊	白河院探題歌会	
二二四 鹿	「山里」秋ののはら	小弁	新拾遺集・秋下	
二二五 鹿	「さがのの花」野辺	静連	千載集・秋上	
二二六 鹿	「西山にすみける比」つかはす	西行		
二二七 鹿	「しきのきりはら 野辺」「かへし」	能宣		
秋花	「さが」大官人のくる野辺			

秋上の主題は、早秋(二二)、秋風(二二)、七夕(二二)、秋月(三六)、雁(三三)、鹿(二二)、秋花(二二)である。秋月は、春の桜に次いで、四季部を代表する歌題である。すでに別稿で論じたように、秋月歌群は大きく二分され、前半は一八二歌までで前代歌人を中心として、清澄な秋月を賛美する趣向の作が巧妙な展開のもとに配列されている。後半は歌枕を詠みこんだグループ、昼のような明月を詠んだグループ、述懐をこめて詠んだグループなどが連係的に配列されている。桜花の場合と同様に、述懐性の濃い作品群が四季の部立に選入されている。

るところに『続詞花集』の特質のひとつがあるように思われる。「七夕」は二星の逢瀬の経過に従って配列されている。「雁」や「鹿」も概して穩健で平明な作品が選ばれ、和歌的伝統にのっとった配列態度で一貫している。巻末の秋花は萩ではじまる秋部下につながる。

五

秋部下は六十二首で、構成を表にすると次のようになる。

一連番号 (中心的歌材)	主 題 (中心的歌材)	その他の歌材・歌枕など	作 者	主な出典資料	備 考
二二八 萩	露 秋の野 「待草花心」	あき山のふもと 家居 末の野 まがき	頭季		
二二九 萩	「近対草花」	袖 秋の野 にしき	伊家		
二二〇 萩	露 真野のむら萩 「雨中野花」	宮城野の野のもとあらの小萩 「雨夜思萩心」	頭季		
二二二 萩	秋風 「女郎花随風」		長能	忠道家歌会	金葉集三奏本・秋 千載集・秋上
二二三 女郎花			雅兼		

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

二二四	女郎花	いそのかみふるから野辺	親隆	久安百首	
二二五	女郎花	荒れゆく宿 露けき秋の夕暮れ	肥後	堀河百首	
二二六	女郎花	露	経忠		
二二七	藤袴	紫の色	資隆		
二二八	薄	(東路の)いはたの小野 穂に出でぬ「思野花」	伊家		金葉集二度本・秋
二二九	花薄	わが宿 野辺 人なまねきそ	読人不知		千載集・秋上
二三〇	花薄	雉子なく交野のみの 人なまねきそ	時房		
二三一	花薄	行きかふ人をまねくなり	孝清		
二三二	花薄	「さがのに花見」まねくはさが	道命		千載集・秋上
二三三	花薄	秋野の風 かたみにまねく「野花随風」	尾張		
二三四	花薄	秋野の風 まねかざりせば	行宗	鳥羽殿前裁合(嘉保二年八月)	続後撰集・秋上
二三五	薄	秋風 野辺	顕季	同右	
二三六	萩	萩の上風 秋のけしき 身にしむ	行宗	同右	千載集・秋上
二三七	萩	萩の上葉に風わたる 夕暮れ 身のほど	行宗	久安百首	新古今集・秋上
二三八	萩	萩の上風 秋の寝覚め	師頼	堀河百首	続千載集・雑体
二三九	刈萱	白露 ぬれ衣	大式三位		
二四〇	露		和泉式部	(花山院歌合)	
二四一	露	袂にかかる秋の夕露	堀河	久安百首	千載集・秋上
二四二	ひぐらし	夕暮れ	長能		新古今集・秋上
二四三	鈴虫	声はふりせず	三河		
二四四	虫の音	草むら 我もこの世はなかね	好忠	三百六十首	続古今集・秋上
二四五	虫の音	浅茅生 露 木枯らし	但馬	野宮歌合(天禄三年八月)	続後撰集・秋上
二四六	虫の音	「草むらの夜の虫」露	時文	頼忠家歌会	
二四七	擣衣	をちの里人 霧「遠聞擣衣心」	匡房		
二四八	擣衣	とをちの里 秋の夜の寝覚め 寒風	濟円		
二四九	擣衣	玉川の里 松風	俊頼	堀河百首	千載集・秋下
二五〇	松風	住吉 秋の空	為業		
二五一	霧	宇治の河霧 雲居にみゆる朝日山	公実	堀河百首	新古今集・秋下

二五二	霧	秋の田の穂波 夕霧 鶉	崇徳院	久安百首	
二五三	霧	山田の庵 夕され 稲葉の風	行宗		
二五四	秋風	庭の面 浅茅なみよる夕風	範兼		続古今集・雑上
二五五	秋思	身にしむ秋 老い	道濟		
二五六	秋夜	窓うつ雨の音「秋夜長心」	公重		千載集・秋下
二五七	秋の寢覚め	はるかなるもろこし	大式三位		
二五八	菊	「九月九日人のもとより」匂ひかはらぬ花	為忠		
二五九	菊	「籬菊如雪」	行慶		千載集・秋下
二六〇	菊	老い しらがにまがふ白菊の花	孝善		新古今集・秋下
二六一	菊	籬	有仁北方		
二六二	残菊	うつろふままに	行慶		
二六三	残菊	うつろふ色 霜	弁乳母	上東門院菊合 堀河百首	玉葉集・秋下
二六四	紅葉	長月の時雨 正木の上葉	仲実	(頼通紅葉見)	千載集・秋下
二六五	紅葉	龍田姫 紅葉のにしき	小弁		
二六六	紅葉	佐保山	能宣		金葉集三奏本・秋 千載集・秋下
二六七	紅葉	駒をとどむ	長能		
二六八	紅葉(散)	山姫 千重のにしき	頭輔	(頭輔家歌合)	
二六九	紅葉(散)	かみがき山の麓 ぬさ	宗延		
二七〇	紅葉(散)	紅にやしほ染め 嵐 「落葉隨風」	中将		
二七一	紅葉(散)	白河の水 浅き瀬もなし	読人不知		
二七二	紅葉(散)	故郷 軒のしのお 秋風	俊頼		新古今集・秋下
二七三	落葉	峯の風 (旅寝の)夢	弁乳母		
二七四	行秋	長月ふたつある年	兼昌		
二七五	九月尽	小倉山の麓 暮れぬる秋の空	範永	(頼資家歌合)	
二七六	九月尽(行秋)	まねく薄の袖も露けし	心覚母		
二七七	行秋	草の葉 露	師俊		金葉集・秋
二七八	行秋	一夜さきだつ時雨 涙	読人不知		
二七九	行秋	萩の葉 風 秋のあはれ	範兼		

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

二八二	紅葉(散)	嵐吹く山のあなた となせの滝「紅葉浮水」	経信	(白河院大井川御幸、承暦三年)	続古今集・冬
二八三	紅葉(散)	大井川 となせ 冬の梢	通俊		
二八四	落葉	もらぬ時雨 真木の板屋	顕広	久安百首	千載集・冬
二八五	時雨	木の葉 寝覚め	馬内侍	忠通家歌会	千載集・冬
二八六	時雨	袂 真木の板屋 夜半の寝覚め	定信		千載集・冬
二八七	時雨	とふ人もなき山里	覚雅		金葉集二度本・冬
二八八	山家冬	鹿の音も人もおとせぬ山里	宗国		
二八九	山家冬	都 木枯らし 峯の松風	頼定女		千載集・冬
二九〇	綱代	宇治の河霧 朝ぼらけ	定頼		千載集・冬
二九一	冬月	女郎花「月照寒草」	崇徳院		
二九二	冬月		永輔	永承四年内裏歌合	
二九三	冬月	雲吹きはらふ木枯らし	師輔		
二九四	冬月	衣手寒し 大空	季行		
二九五	千鳥	有明の月(のてしほ) 磯づたひ	忠盛		
二九六	千鳥	(みちのくの)野田の玉川 潮風 夕され	能因		新古今集・冬
二九七	千鳥	河霧 汀	長能		金葉集三奏本・冬
二九八	水鳥	我もうきたるよを過ごす	紫式部		千載集・冬
二九九	鴛鴦	谷川 つららの床	覚性	久安百首	
三〇〇	鴛鴦	うきね うはげの霜 下の氷	崇徳院		千載集・冬
三〇一	鶴	冬夜 霜	道信		新古今集・冬
三〇二	霜	竹の葉 もとの露	赤染衛門		続古今集・冬
三〇三	霰	ささの葉 夜	馬内侍		千載集・恋五
三〇四	初雪	み吉野の山 夜	二条天皇	永暦二年内裏百首	新拾遺集・冬
三〇五	初雪	さやの中山 旅寝の床 風 「行路初雪」	実行		千載集・羈旅
三〇六	初雪	旅人の柴摺り衣	正家	師実家歌合(嘉保元年八月)	
三〇七	雪	外山 柴の下葉をちの高嶺	顕綱	同右	千載集・冬
三〇八	雪	山の白雪 こしの高嶺	通俊	同右	金葉集二度本・冬
三〇九	雪	山路 谷のかけはし 梢	俊頼	同右	千載集・冬

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

三二〇	雪	箸鷹のとがへる山 白斑	隆縁	新古今集・羈旅
三二一	雪	山路 旅人のかさ	経信	
三二二	雪	山路われひとり行く心地	白河院	
三二三	雪	山路越え行く人 まくりて	経信	
三二四	雪	「旅宿雪」松がね をばな かたしく袖	顕季	新古今集・羈旅
三二五	雪	花薄	下野	
三二六	雪	賤のふせや けぶり	公重	
三二七	雪	呉竹の折れふす音 深き夜	明兼	千載集・冬
三二八	雪	朝戸 片岡のならの枯れ葉	経信	千載集・冬
三二九	雪	霜がれの籬 菊より後の花	資隆	千載集・冬
三三〇	待春	山里 朝けのけぶり さき立つ霞	頼家	千載集・冬
三三一	梅	山里 香 「年の内に咲ける梅」	明快	千載集・冬
三三二	梅	鶯(の鳴かぬばかり) にほひ	頭方	
三三三	歳暮	身につもる(とし)	実清	
三三四	歳暮	はかなき夢の心地	俊宗	千載集・冬
三三五	歳暮	暮れ行く年の日数	相模	千載集・冬

冬の主題は初冬(二)、落葉(三)、時雨(三)、山家冬(二)、綱代(一)、冬月(四)、千鳥(四)、鴛鴦(二)、鶴(一)、霜(一)、霰(一)、雪(一六)、待春(一)、梅(二)、歳暮(三)である。冬部は雪に代表される。

雪の歌群は、経信作三首をはじめ、顕綱、通俊、白河院、顕季、下野などの前代歌人(『後拾遺集』初見作者)の作が多い。また、出典資料では師実家歌合の作四首(三〇六〜三〇九)が目立っている。表の、その他の歌材・歌枕などの欄を参照してわかるように、各首の語句的な連関も緊密である。さらに、七首が『千載集』に入集している。前述の春部の桜花の場合と同様、俊成によって評価された選歌、

配列であると思われる。三〇七歌、三〇八歌、三〇九歌は『千載集』の一連番号では四五三、四五二、四五四である。

三二〇歌(待春)、三三一歌(梅)、三三二歌(梅)は、春の季節に連環する歌題構成である。冬部末尾に置かれた歳暮を詠むさがみ詠は次の通りである。

あはれにも暮れ行く年の日数かなかへらんことはよのまと思へば

おわりに

以上のように掲載した表によって吟味した『続詞花集』四季部の配

霧	秋風	朝顔	女郎花	露	鶉	萩	霧	鹿	駒	雁	虫の音	秋月	七夕	立秋	後拾遺集
1	6	1	6	7	2	8	1	12	3	4	8	18	10	3	
霧	薄	女郎花	藤袴	女郎花	萩	野花	鹿	雁	虫の音	秋月	早秋	女郎花	七夕	立秋	金葉集
1	2	1	3	4	2	1	5	2	2	44	4	2	9	3	
紅葉	菊	鹿	駒	虫の音	萩	萩	藤袴	朝顔	花	霧	秋風	秋月	七夕	立秋	詞花集
8	4	2	1	5	1	1	1	1	1	1	5	13	10	2	
刈萱	萩	薄	藤袴	女郎花	萩	(以上秋上67)	花	鹿	雁	秋月	七夕	早秋	秋風	早秋	続詞花集
1	2	8	1	4	5		1	12	3	36	11	1	2	1	

秋部

合計	祓	夏暮	床夏	夏月	氷室	納涼	蘆
70	1	6	3	3	1	1	1
合計	祓	夏月	秋風	夏月	鶉河	露	
62	1	1	1	1	1	1	
合計			露	蟬	閏六月七日	夕立	
31			1	1	1	1	
合計	祓	萩	藤袴	夏暮	納涼	蘆	
55	1	1	1	1	3	1	

「続詞花和歌集」四季部の配列構成について

冬月	山家冬	千鳥	綱代	落葉	時雨	立冬	後拾遺集
1	1	3	2	3	2	3	
冬月	綱代	紅葉	鹿	竹	落葉	時雨	金葉集
1	1	1	1	1	3	4	
鷹狩	綱代	時雨	冬月	冬風	落葉	立冬	詞花集
1	1	2	1	1	5	2	
千鳥	冬月	綱代	山家冬	時雨	落葉	初冬	続詞花集
4	4	1	2	3	3	2	

冬部

合計	(秋下)	(行秋)	九月尽	秋田	時雨	紅葉(散)	菊	紅葉	木枯	秋月	擣衣	(以上秋上100)	秋思	花	薄
142	42	6	3	1	8	12	6	1	2	3			2	6	2
										合計			九月尽	紅葉	菊
										101			3	11	2
												合計		九月尽	初霜
												58		1	1
合計	(秋下)	九月尽	行秋	紅葉	菊	寝覚め	秋夜	秋思	秋風	霧	松風	擣衣	虫の音	鈴虫	ひぐらし
129	62	2	4	10	6	1	1	1	1	3	1	3	3	1	2

寝覚め	1	冬夜	1	雪	6
鷹狩	3	千鳥	1	歳暮	2
霜	3	氷	5	合計	21
霰	2	雪	1	霰	1
水	5	鷹狩	4	霜	1
歳暮	2	雪	3	待春	1
合計	48	神楽	10	梅	2
		高瀬舟	2	歳暮	3
		鴛鴦	2	合計	46
		歳暮	6		
		合計	48		

〔注〕

1 『統詞花集』に即した研究に限り管見の参考文献に次のようなものがある。

○小林勝巳氏「統詞花和歌集所載百首和歌・歌合・歌会・私家集等の歌に関する覚書」(名古屋大学「国語国文学」10号、昭和三十七年五月、なお同じく12号、昭和三十八年三月に資料篇がある)

○青木賢豪氏「統詞花集について——堀河百首の成立をめぐっての関連——」(『語文』第十九輯、昭和三十九年一〇月)

○松野陽一氏「統詞花集雑考」(『平安文学研究』三十六輯、昭和四十一年六月)

○遠田晤良氏「統詞花集」の特質に関する覚え書き」(『苫小牧工業高等専門学校紀要』3号、昭和四三年三月)

○関根敏子氏「和歌史における統詞花集の意義」(『都留文科大学研究紀要』8、昭和四七年八月)

○王朝文学研究会編「後葉集・統詞花集・雲葉集——作者索引——」

『統詞花和歌集』四季部の配列構成について

〔王朝文学〕19、昭和五〇年二月)

○阿部方行氏「統詞花和歌集恋部の配列構成」(『中古文学』第十八号、昭和五一年九月)

○河合一也氏「統詞花集の撰集資料について」(『語文』第五十二輯、昭和五六年六月)

○河合一也氏「統詞花集と前代勅撰集——勅撰集被除歌入集の問題を中心として——」(『語文』第五十九輯、昭和五九年五月)

2 拙論は以下の通り。

○「清輔と能因法師」(『ブディスト』第13号、昭和五七年七月)

○「統詞花和歌集」の一考察——赤染衛門と和泉式部の入集歌をめぐって——(『相愛女子短期大学 研究論集』第三十卷、昭和五八年二月)

○「統詞花和歌集」についての試論」(『国文学論叢』第二十八輯、昭和五八年三月)

3 松野ゼミナール「和歌史研究 平安末期私撰歌集の研究(1)——後葉・今撰・統詞花・月詠の配列と構成——」(『文芸論叢』3号、昭和四二年二月)、「同(2)」(同)4号、昭和四三年二月)にそれぞれ「統詞花集」の春、夏の部立についての考察が、すでにあるが、本稿では筆者なりの整理を試み、注1掲出の拙論を補うものとする。

4 谷山茂先生「詞花集をめぐる対立」(著作集三「千載和歌集とその周辺」所収、「人文研究」昭和三十七年六月初出)は、この俊頼の巻頭歌が「詞花集」の巻頭歌に似た対象をよみ「その詠風も古今のものよりは、やはり詞花的なものに近いと言えるのではあるまいか。」と述べている。

5 俊成は「正治二年俊成卿和字奏状」において「統詞花集」を勅撰集にすることを拒否された清輔の打聞(私撰集)とみなし、その内容をも強く非難している。したがって俊成が「統詞花集」を撰集資料として用いて

【統詞花和歌集】四季部の配列構成について

いるのは、あくまで私撰集としてあつかう姿勢のあらわれであり、言い換えれば、この部分において俊成は『統詞花集』を破っているとみることもできる。

6 拙稿「鴨長明『無名抄』「俊成自讃歌事」の段をめぐって」（『国文学論叢』第三十輯、昭和六〇年三月）に考察した。

7 注2に掲出の拙論「統詞花和歌集」の秋月歌群について」参照。

8 掲載の表について、『後拾遺集』は『後拾遺和歌集 全訳注』（藤本一恵著、講談社学術文庫、底本は陽明文庫蔵乙八代集本）、『金葉集』は新編国歌大観（角川書店、底本はノートルダム清心女子大学付属図書館蔵本）、『詞花集』は『詞花集の研究』（松田武夫著、至文堂、底本は岩波文庫本）、また、『新古今和歌集の研究 基盤と構成』（有吉保著、三省堂）所収の「八代集四季歌各季の歌題排列一覧」を、それぞれ参看して作成した。ただし、比較検討の便宜のため参考文献の基盤そのままの主題ではない場合がある。なお、注3に掲出の松野ゼミナールの論考にも『詞花集』、『後葉集』、『今撰集』、『月詣集』、『千載集』の四季部歌材一覧集が提示されている。他の私撰集を含めた詳細な比較検討は今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿は昭和五十九年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）による研究の一部である。

また、本稿の校正中に河合一也氏「統詞花和歌集四季部における配列構成（一）春部」（『研修ノート』第11号昭和五十九年十一月）が発表された。